

## 英語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察： 動詞 *have* を含む発話文の分析から\*

松 藤 薫 子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

**要 約** 本研究では、英語児の自然発話資料に基づき、叙述的所有表現の獲得過程を考察することを目標とした。*have* を含む文に焦点をあて、大人の言語知識において *have* の主語と目的語がどのような意味関係を表すかを整理し、大人の言語知識を子どもがどのように獲得するのかを考察した。その結果、(A) のような大人の言語知識に対して、(B) のような子どもの獲得過程で見られる特徴を明らかにした。

(A) *have* を含む文に関する大人の言語知識

他動詞 *have* は2項 (A・B) を持ち、それを含む文は動作文と状態文に大別される。動作文は「A が B の行為をする, A が B を受ける, A が B の飲食をする」などの意味を表す。状態文は「A は B を A のものとして持っている」という所有関係を表す。この所有関係は複雑で広範囲の関係を表しうするため、Taylor (1996) や Heine (1997) が用いた家族的類似性という概念に基づき、(a) の特徴すべてを満たすものが「典型的所有関係」、それから多少逸脱するものとして「(人と) 家族・友人関係」, 「(人と物の) 携帯関係」, 「全体と一部の関係」, 「(植物・人工物と物の) / (人と事の) 近接関係」があるとする。

- (a) i. 所有者は人間である。
- ii. 所有物は無生物で、通常、価値のある具体的で物質的な人間以外の物である。
- iii. 所有者に所有物を利用するための独占権がある。
- iv. 所有物は所有者と近接した位置関係にある。
- v. 所有関係が長期にわたる。

(B) 子どもの言語獲得過程にみられる特徴

動作動詞 *have* を含む文は2歳から使われ始める。

状態動詞 *have* を含む文は2歳から使われ始める。人間が所有者、物が所有物であるかどうかは明らかではないが、(a) の特徴のうち (i) (iv) の人と物の(短期の)「近接関係」が高頻度で表された(これは大人ではみられない)。この頻度は、年齢が上がるに従って下がるが、5, 6歳になってもその使用が無くなることはない。

使用頻度は少ないが「携帯関係」「全体と一部の関係」「家族友人関係」は2歳, 3歳から表される。「典型的所有関係」は3歳以降に少しずつ表されるようになる。「典型的所有関係」を表すには、(a) の5つの条件をすべて同時に満たさなければならない。*have* を含む文と特に所有物の価値, 所有者の独占権, 所有関係の長さを結びつけることに困難を伴うように思われる。英語児の叙述的所有表現の獲得に関する仮説として (C) を提案する。

(C) 英語児の獲得過程には、*have* 所有文に関しては近接関係から典型的所有関係への意味の拡張がある。

**キーワード**：叙述的所有表現, 言語獲得研究, 英語

日獣生大研報 65, 25-33, 2016.

### 1. は じ め に

本研究では、松藤 (2015) で示した日本語児の叙述的所有表現の獲得過程の考察から得られた知見を踏まえ、主に英語に焦点をあてて、自然発話資料の分析結果に基づき、英語児の叙述的所有表現の獲得過程を明らかにする。叙述

的所有表現とは、人間が物を自分のものとして所有していることが文によって表されている表現のことである。

松藤 (2015) では、日本語児2人S児 (0;0 ~ 6;11) とN児 (1;2 ~ 5;0) の発話資料に基づき、所有構文「X は / に / は Y がある」「X は / が Y を持っている」において、これらの構文がいつ頃から使い始められるの

か、この2つの構文が表す意味の差異が子どもの発話にみられるのか、子どもの言語獲得過程で意味の漂白化がみられるのか(ここで使った「意味の漂白化」とは、所有物を獲得するという行為がまず表現され、次にその結果として得られる状態、所有関係が表されるようになるということ、Givón1984: 103, Heine1997: 47, OED2004)を考察した(( ; )は( 歳 ; ヶ月)を示し、例えば、(6;11)は6歳11ヶ月のこと)。

その結果、明らかになったのは、これらの構文が2歳台から使われ始めるという点である。大人は、「ある」「持っている」を含む所有文と「持っている」の携帯文を使用するが、子どもは、全体と一部の関係をとらえる「ある」状態文と「持っている」の携帯文を使用する点に相違があった。具体的には、まず子どもは「人間・動植物」と「その具体的属性」を全体と一部の関係でとらえた(S児(2;2)発話「ばく はあ ある」「ばくには歯がある」)。その後「人間・動植物・人工物」と「その具体的属性や身の回りの物」を全体とその周辺部へと拡張させた関係でとらえた(S児(4;0)発話「おばあちゃん おかねが たくさんあるの」)。「持ってる」文は、人間や動物が日常的な人工物を携帯するという意味を表し、動作動詞「持ってる」が使われた(S児(2;1)発話「おかね もってるんよ」)。観察対象児は、大人の言語知識の1つ、「ある」「持っている」構文を所有の意味で使うことがみられなかった。以上の考察から、日本語児の叙述的所有表現の獲得に関する仮説として(1)を提案した。

(1) 日本語児の獲得過程には、「ある」所有文に関しては全体と一部の関係から所有者と所有物の所有関係への意味の拡張、「持っている」文に関しては、携帯から所有への意味の漂白化がある。

以下、日本語と英語の叙述的所有表現の獲得の背後にある法則性の解明を目指し、本研究では、英語の叙述的所有表現 have 文の獲得過程を考察する。

## 2. 英語の叙述的所有表現

叙述的所有表現の1つに、主語と目的語を取る他動詞 have を含む文がある。

動詞 have は所有以外にも様々な意味を表す。(2)は have が様々な意味で使われた典型的な例文である。

- (2) a. The baby is having her nap.  
b. I just had a phone call from Judy.  
c. I had prawns and rice for lunch.  
d. We had a wonderful vacation.  
d'. I have a cold.  
e. He had a new car and a boat.  
e'. She has an uncle in Wisconsin.  
e". I have a big nose.  
e"". Do you have any money on you? (=Are you carrying money with you?)  
f. Our house has three bedrooms and two baths.

f'. The tank still has water in it.

(Cambridge Dictionary Online 2015, Longman Dictionary of Contemporary English 2015, Merriam-Webster 2015, Oxford Dictionary of English 2005)

have の意味は、(2a)で DO (する)、(2b)で RECEIVE (受ける)、(2c)で EAT and DRINK (飲食する)、(2d)で EXPERIENCE (経験する)、(2e)で POSSESS (所有する)、(2f)で CONTAIN (含む)である。(2e)～(2e'')の have で表されている意味は POSSESS とされているが様々な意味が含まれる。人と、その人の物として認められている車・ボートの関係(2e)、人と親類の関係(2e')、人とその人の体の一部の関係(2e''), 人とその人が所持している物の関係(2e'')などを表している。(2e-e'')と(2f, f')では have が表す意味がそれぞれ POSSESS, CONTAIN とされ、(2e-e'')は主語が人のため人が物を所有する、(2f, f')は主語が物のため物が別の物を含むような異なった意味とされたようである。しかし主語の種類に関わりなく(2e-e'')と(2f)は永続的な所有、(2e'')と(2f')は一時的な所有ととらえることができる。

have は共時的には、(2)のように動作動詞としても状態動詞としても使われる。通時的には、OED (2004)によると、have は動作動詞として HOLD IN HAND (手に持つ)という意味から始まり、その後、主語と目的語の静態的な関係を表す状態動詞として HODL IN POSSESSION (所有している)という意味を表すようになったという記述がある。

文の意味表示をするためには、文は述語と項に分割される。述語は対象のある性質を表したり、2つ以上の対象間の関係を表したりする用語である。述語は対象について何かを述べるものであるが、その対象が述語の項と呼ばれる。例えば、Tom has a car. という文では、have が述語となり、Tom と a car がその項となる。have は2項、例えば A (所有者 the possessor) と B (所有物 the possessed) を取り、A と B の対象間の関係(所有)を表す。

have は(2)でみたように、様々な意味を表すが、まず2つに大別される(動作・状態)。動詞 have が動作動詞の場合、A と B の関係として、(3a) DO ACTION (する) (3b) RECEIVE (受ける) (3c) EAT or DRINK (食べる、飲む)を表す。

- (3) a. The baby is having her nap. He didn't have a birthday party this year. We're having a party on Saturday.  
b. I just had a phone call from Judy. We had news.  
c. I usually have breakfast at about seven o'clock. She sat down and had another drink.

動詞 have が状態動詞の場合、(2)の EXPERIENCE (経験する)、POSSESS (所有する)、CONTAIN (含む)を表す。それらをまとめると、have が持つ2項 A, B 間では、POSSESSION (所有)関係があり、「A が B を A のもの

として持っていること」とする。池上 (2006: 116-117) は、認知言語学の視点から、所有という概念は、存在の概念と近接の概念を含むとし、まず A が指す現実の事物 ENTITY と B が指す ENTITY が存在しており、A と B が近接している (そばにある) 場合に生じると述べている。例えば、私たちは、ある人のそばに、ある特定のものが常に見出されるという状況を繰り返し経験すると、両者の間には所有というような関係があるのではないかと池上は推論している。

しかし「近接」や「そばにあるという期間」には、程度 (それぞれ距離感や時間の長さ) が含まれる。所有の概念を構成するのは、存在・近接・時間だけではない。

所有という概念は、複雑で広範囲の関係を表しうるため、所有を決定づける特徴でとらえるより、むしろ一部分ずつ共有していて相互に関連しあう緩やかな結びつき (家族的類似性 family resemblance, 典型 prototype) でとらえられてきた (Taylor 1996: 340, Heine 1997: 38-39)。(4) は典型的な特徴であるが、典型から多少逸脱を許すことで所有の様々な関係がとらえられる。

- (4) a. The possessor is a human being.  
 b. The possessed is an inanimate entity, usually a concrete physical object of value.  
 c. The possessor has the exclusive rights to make use of the possessed.  
 d. The possessed is located in the proximity of the possessor.  
 e. The possession relation is a long term one.

(Taylor 1996: 340, Heine 1997: 38-39)

上記でみた池上 (2006), Taylor (1996), Heine (1997) を踏まえ、本研究では、まず、(4d) の所有物が所有者の近接に位置するという特徴に基づき、A と B が密着している場合がある程度近くにある場合とに分類する。A と B が密着している場合には、A と B が全体と一部という関係になり、これを WP (Whole-Part) と表す。A と B がある程度近くにある場合には、その状況が長期間に渡るのかあるいは短期間であるのかによってさらに分類する。長期間で所有者が人間の場合、A と B は所有関係を示す。この所有関係を POSS (Possession) と表す。短期間の場合、1 つは、A と B は近接関係を示す。この近接関係を LOC (Location) と表す。もう 1 つは、A と B が所持関係を示す。この所持関係を LOCACT (Location + Action) と表す。

(5) は A と B の関係を (4) の特徴で示したものである。+/- は有 / 無を表す。例えば、+animate は生命のある物、-animate は生命のない物である。

- (5) a. WP: a. human, +/- animate  
 b. +/- animate obj, concrete physical obj, +/- value  
 c. - exclusive  
 d. long term  
 e. (maximal) proximity

- a'. WP': a. human, +/- animate  
 b. +/- animate obj, abstract attribute, +/- value  
 c. - exclusive  
 d. long term  
 e. (maximal) proximity  
 b. POSS: a. human  
 b. - animate obj, concrete physical obj, value  
 c. exclusive  
 d. long term  
 e. proximity  
 b'. POSS': a. human  
 b. human, value  
 c. +/- exclusive  
 d. long term  
 e. proximity  
 c. LOC: a. +/- animate  
 b. +/- animate obj, concrete physical obj, +/- value  
 c. - exclusive  
 d. - long term  
 e. proximity  
 c'. LOC': a. human, +/- animate  
 b. abstract matter, +/- value  
 c. - exclusive  
 d. - long term  
 e. proximity  
 d. LOCACT: a. human  
 b. - animate obj, concrete physical obj, +/- value  
 c. +/- exclusive  
 d. - long term  
 e. proximity

(5b) の POSS は典型的な特徴を示す。その他の意味関係は (5b) より逸脱した特徴を含む。意味関係にプライム符号がついているもの、例えば (5a) WP に対して (5a') WP' は、WP の諸特徴の中の一部が逸脱していることを示す。下線のものが逸脱した特徴である。

A の所有者には、人、動物、植物、人工物、無形の概念がなりうる。B の所有物には、物 (車やペン)、家族・友人、事 (用事や考え)、具体的属性 (鼻、トゲ、煙突)、抽象的属性 (能力・熱) がなりうる (松藤 2015)。Table 1 は、その両者がどのような関係を表しうるかを示したものである。空のマスは、どの意味関係も表さないことを意味する。Table 1 の中の数字は、表される関係があるマスに、人・動物を所有者とする横マスを左から順に、次に植物を所有者とする横マスへと、数字をつけたものである。

Table 1. 所有者と所有物の関係

A \ B	物	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	1a POSS, 1b LOCACT	2 POSS'	3 LOC'	4 WP	5 WP'
植物	6 LOC			7 WP	8 WP'
人工物	9 LOC			10 WP	11 WP'
無形の概念					12 WP'

(6) は Table 1 の数字が付けられた意味関係を表す典型的な例文である。

- (6) 1a. I have a building/ a shop/ a house/ a car/ a motorcycle/ some money/ a gun/ a cow/ a dog/ a watch/ a pen. She has a red bike, and I have a blue one. She has her own room.
- 1b. Mandy has a basket on her lap. I have some money on me. He had the newspaper in his right hand. I'm afraid I don't have my address book with me.
2. I have a sister. Carol has six sisters. She has an uncle in Wisconsin. I have a friend who could lend us a car.
3. We have things to do. I have an opinion. She has two jobs. I have a lot of happy memories of my time in Japan. He has an awful feeling of guilt. I have some good ideas for presents. Her boyfriend has a well-paid job.
4. I have blue eyes. I have a big nose. I have red hair. She has dark hair and brown eyes. One of the victims has a broken leg. I have a fever/ a headache/ a cold.
5. The head teacher has responsibility for the management of the school. I have the ability to solve the problem.
6. The flowers have water droplets on them.
7. Does every rose have a thorn?
8. Wild rice has a very nutty flavor.
9. Our house has three bedrooms and two baths. My study has a lot of useless books in it. The Chicago area has a population of about eight million. Japan has a population of over 120 million. This proof has no error. The tank still has water in it.
10. The car has power brakes.
11. A new Ferrari has a lot of power. (Ferrari はイタリア高級車種「フェラーリ」)
12. April has 30 days. Sullivan's music does have a certain charm.

### 3. 英語児の叙述的所有表現の獲得

Tomasello(1992)では、著者とその妻が自分の娘 T 児(1;0

～2;0) の発話を日記に書き留めたデータベースに基づき、主に動詞の使用が認知言語学の枠組みで分析されている。1歳台の T 児が have によって表す意味は、感覚運動知能(空間認知能力)に基づき「ある物がある場所にある」のような概念であるとした。(7) は T 児の代表的な have を含む発話文であり、括弧には Tomasello (1992) から引用した発話時のコンテキストが示されている。(7) は「物が人から離れた場所にあり、物が移動することにより、人のそばにある」という出来事のうち、出来事の終わりの部分が表されている(影山 2002)。T 児は出来事の終わりに至る途中経過は、これらの文を発話するというそれ自体の行為により伝え、(7) は概ね、ある物がある場所から自分のいる場所へと移動することを要求したり、コメントしたりした。

- (7) a. (1;7) の発話: Balloon have-it (she wants it), Have-it cards (she wants them), Daddy have this wallet (holding his wallet, she wants him to have it), Danny have this ball (he has it), Linda have-it more cream (she'd been told we have no more ice cream. Linda gave her some days before)
- b. (1;9) の発話: Have juice in my bottle (she wants it), Have a doughnut for you (telling me), Have me too myself, Daddy (wants what I have, nuts), Yesterday Maria had umbrella (reporting)
- c. (2;0) の発話: She has snake in her neck. (cat with worms)

1歳台に have 文が表す意味がどのようにして大人の意味となるのかに関しては、子どもがより多くの表現を習得し使い分けができるようになると、大人の所有の意味に近づくと Tomasello (1992: 69-71, 77-79) は考えている。子どもは have 文で「あるものがある人のところにある」を表し始める。その後、Mommy's pillow や my bottle のような所有形を含む名詞句で所有を表し始める。have と give の使い分けや get と hold の使い分けなどができるようになると、子どもは大人が表す所有の意味に近い意味を表すようになると Tomasello は言っている。

2節で示した大人の言語知識で見られる意味に基づき、T 児の have を含む発話文において、どのような意味が表されているのか考察を加える。Tomasello (1992: 309-310) の Appendix にある発話例 28 例を分類すると、Table 2 のような結果がみられた。

意味の横の数字、例えば“LOC 16”は、LOC が表された発話文が 16 文あったことを意味している。下線のあるものは、大人の言語知識とは違っている部分を示している。大人の言語知識とは違っているもののなかには、大人なら表さない意味(例えば大人は have 文を用いて、物が人のところ・そば(LOC)にあることを表さない)や大人の使用可能な意味が当該の発話文には見られないものが含まれる。



Table 2. T 児 (1;0 ~ 2;0) の *have* の意味

A \ B	物	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC 16, LOCACT 3, POSS 1	POSS' 0	LOC' 0	WP 0	WP' 0
植物	LOC 0			WP 0	WP' 0
人工物	LOC 0			WP 0	WP' 0
無形概念					WP' 0

動作動詞 *have* 文：ACT：人+物 8

*have* の発話文では、動作動詞の発話が 8 文（全例文の 28.57%）あり、状態動詞の発話が 20 文（全例文の 71.43%）あった。状態動詞の発話文の内訳は、LOC 文が 16（57.14%）、LOCACT 文が 3（10.71%）、POSS 文が 1（3.57%）であった。A と B の関係は、LOC であることが多かった。A が動物 1 例を除くとすべて人間であった。B が日常的な身の回りの物であった。POSS を表す文でみられた所有者は人間、所有物はボールであった。

*have* 文が LOC でよく用いられた点は Tomasello (1992) が指摘していることと同じであるが、もう少し詳細に調べると 1 歳台の T 児は LOC 以外にも、ACT, LOCACT, POSS を表していた。

以下、T 児にみられるような意味の使用が他の子どもにもみられるのか、大人の言語知識をどのように獲得していくのかを考察する。

### 3.1 発話資料と分析方法

本研究では、口頭言語のデータベース CHILDES（チャイルズ, Child Language Data Exchange System）から英語児 2 人の発話データを分析する（MacWhinney 2000）。この 2 人は、MacWhinney の息子 2 人である。データは、兄 Ross (1;4 ~ 8;0) の 274 ファイルと弟 Mark (0;7 ~ 5;6) の 268 ファイルである。

発話データを分析するために、CHILDES の一部である CLAN（Computerized Language Analysis）というデータ分析プログラムを使用する。CLAN プログラムの KWAL コマンドで、特定の単語を探し、それを含む文の一覧表を作成する。使用したコマンドは、例えば (8) のようなものである。

(8) KWAL +t\*CHI +s"have" +w2 -w2 +f@

(8) で使われたオプションの機能は、+t オプションは発話者（Ross; CHI, Mark; MAR）を指定し、+s はキーワード *have* を指定し、+w2 -w2 はキーワードを含む発話の前後の発話 2 文を表示させ、+f は検索結果ファイルを保存し、@ は指定されたファイルを検索する機能である。検索して得られた *have* 文において、主語・目的語・*have* が表す関係は、前後の文脈に基づき決定した。

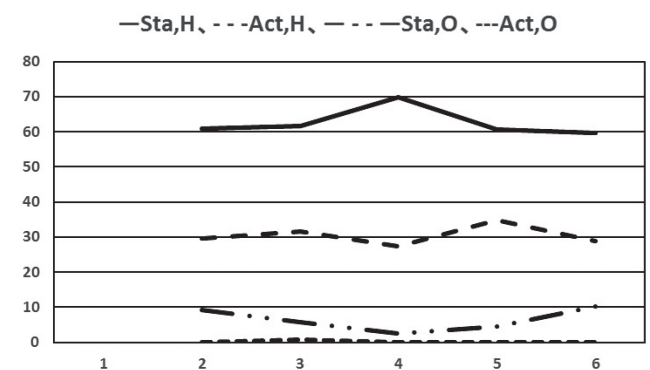
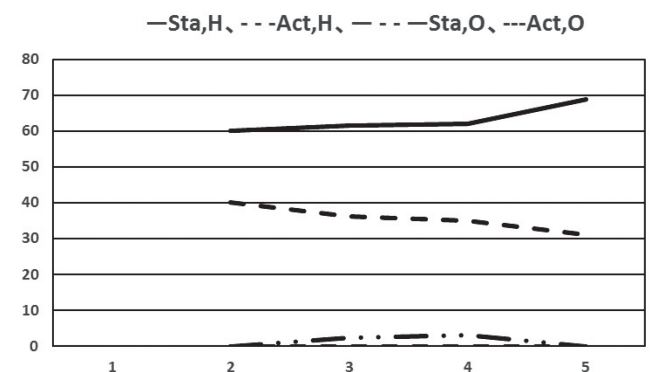
動詞 *have* の獲得過程と比較するために、類義語である *own* と *possess*, A *have* B の A と B が逆になる文 B *belong* to A で使われている動詞 *belong* を検索したが、い

ずれも観察できなかった（*own* に関して、形容詞 *own* を含む *my own hat* のような発話文はあった）。

### 3.2 動詞 *have* を使った所有文の獲得

検索して得られた Ross と Mark の発話文において、どのような意味が表されているのかを整理すると、5 節の後に示した Appendix のような結果が得られた。その結果を踏まえ、以下、*have* の主語・目的語・*have* が表す関係を考察する。

大人の言語知識において、*have* 文の主語になりうるものは、人、動物、植物、人工物、無形概念である。1 歳台の T 児の場合は、その主語のほとんどが人間であった。Fig. 1, Fig. 2 からわかるように、観察児 2 人においても *have* の主語の 9 割以上は人間（動物）であった。Fig. 1, Fig. 2 の Sta, H は *have* 文が Stative 状態文で主語が Human 人間を表す、Act は *have* 文が Active 動作文で、O は Others 人間・動物以外の物を指す。Fig. 1, Fig. 2 は、横軸が年齢（単位が歳）、縦軸が割合（%）を表し、年齢ごとに *have* 文全体数に対して、4 種類の文がそれぞれの程度の割合で現れたかを示している。各年齢で —（状態文で人間が主語の場合）と ---（動作文で人間が主語の場合）が示す割合を合計すると 90% 前後になる。

Fig. 1 Ross の *have* 文の主語Fig. 2 Mark の *have* 文の主語

POSS の主語はどのようなものであろうか。T 児の場合は POSS の主語は人間 1 例であった。Ross, Mark の場合も人間であった。その内訳は (9) のとおりである ([ ]

の数字はその単語が使用された回数を示す)。

(9) a. Ross: I [12], you [5], they [5], he [4], we [3], Marky and I, everyone, him

b. Mark: we [2], you [2], poor/farm people [2], I, they

POSS の所有物は、T 児の場合、身の回りのもので ball の 1 例だけであった。Ross と Mark の POSS を表す発話文では、所有物が (10) のような身の回りの物であり、サイズが小さいもの (おもちゃ、衣類など)、価値のあるもの (お金、銃、宝石など)、サイズが大きいもの (町、家、ジム、車、オープンなど) であった。身近にある食べ物は 1 例だけであった。大人の使用と同様、食べ物は所有物にはあまりなりえないようであった。

(10) a. Mark: toy [3], shoes [2], house [1], money [1], everything [1] (: everything farmers have)

b. Ross: サイズ小 [13]: toy [5], book [3], pants [2], shirt, clothes, gum (食べ物のガム)

価値が大 [5]: money [3], gun, jewelry

サイズ大 [11]: house [4], desk, car, gym, city, oven, barrel, karate place

その他 [3]: stuff, anything, everything

大人の言語知識において、have が表す関係は、A が人間で B が物である場合、POSS と LOC を表す。LOC だけでは表すことはない。代わりに B is {at/by/near/beside/around} A など別の表現が使われる。

1 歳台の T 児の場合は have 文の発話総数において 6 割弱が LOC、1 例が POSS を表していた。年齢が上がるにつれて大人の言語使用に近づくため、LOC の使用回数は減り、POSS は増えると推測される。以下、トレードオフ (trade-off) の関係を考察する。Fig. 3 と Fig. 4 は、Ross と Mark の have を含む発話文全体において、POSS 文と LOC 文がどの程度使われたかの割合を示したものである。

Ross も Mark も年齢が上がるにつれて、LOC 文を使う割合は減るが、5 歳 6 歳になっても全く使わないようになるわけではない。POSS 文を使う割合は少しずつ増えている。

大人は have 文で LOC を表さないが、子どもは 5 歳 6 歳になっても依然として LOC を表すことがある。POSS は少しずつ表せるようになる。POSS を表す have 文の主語は人間である。POSS の目的語は、身の回りのもの、価値のあるもの、サイズの大きいものである。

have が表す意味関係の中で POSS は、条件の強い特別なものである。特に、POSS を表すには、主語 (所有者) が独占的で、目的語 (所有物) に価値があり、所有関係が長期間に渡るという条件を同時に満たさなければならない。これが、子どもが獲得するのに時間がかかる理由と考えられる。

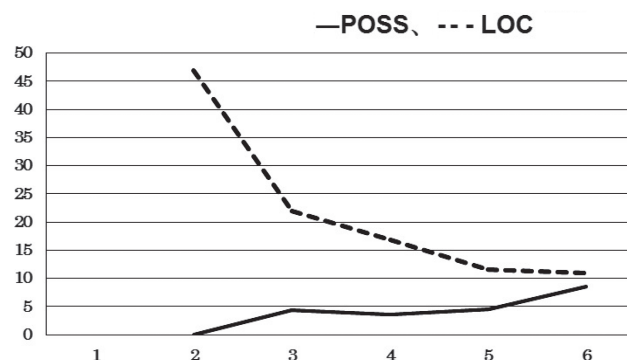


Fig. 3 Ross の年齢別による POSS 文と LOC 文の割合

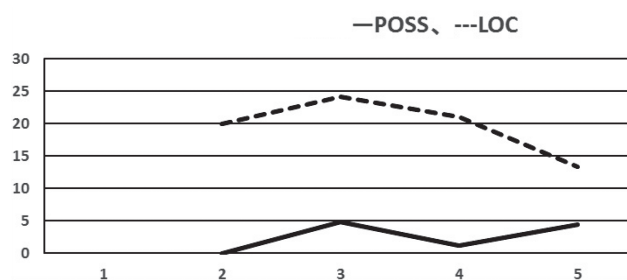


Fig. 4 Mark の年齢別による POSS 文と LOC 文の割合

#### 4. 考 察

3 節で、have 文が使われてもすぐに典型的な所有の意味と結びつかないことを示した。このことに関して、2 つの観点から考察を加えたい。一つは主語を占める人間が表す意味役割の観点からであり、もう一つは典型的な所有の意味を意味構造の一部として持つ buy の子どもの使用の観点からである。

2 歳から 5、6 歳までの発話では、I have a popsicle for daddy (Ross 2:6), We have Pepsi (Mark 3:0) のように、have 文が人と物の近接関係を表した。もし人が単なる場所を表すのであれば、存在文 there's a NP PP, there're NPs PP の中で物理的な位置関係を表す PP という前置詞句の中に人を含むような {at/by/near/beside/around} me などが使われると推測されるが、このような使用がみられるのかを考察する。

3.1 節で示した発話資料と分析方法で、子どもの発話でみられる there's, there're を検索し、その結果から前置詞句がある there 文を抽出した。Ross は、there's NP PP は 23 例、there're NPs PP は 2 例あり、PP には人が使われることなく、すべて物理的な位置関係が表された。

(11) a. there's a car up in the air. (2;9)

b. there's Mark over there. (2;10) (父: Is there a Mark in preschool?)

c. there's no room for me here. (2;10)

(12) a. there're nails in there? (父: You got snails in your nose?) (2;10)

b. there're tigers in the museum. (3;0)

(11) は there's NP PP の発話例である。その PP には

up in the air, over there, here が使われ、単なる場所を表している。(12) は there're NPs PP の発話例である。その PP には in there, in the museum が使われ、単なる場所を表している。

Mark は there're NPs PP は観察されず、there's NP PP は 35 例がみられた。この 35 例においては、PP はすべて物理的な位置関係が表されている。PP に人が使われた例が 4 例みられ、その発話例が (13) である。

- (13) a. but there's not a lot of poo on Marky. (3;5)  
 b. and if there's any person behind me I wont kneel. (3;11) (筆者は wont を won't と推測)  
 c. there's blood in you and stuff. (4;8)  
 d. there's controls in you. (4;8)

(13a) は Mark は排便を終えて母にその始末をしてもらっているとき、自分が排泄した大便が自分にあまり付着していないことを表した発話文である。(13b) では自分と人が前後の位置関係であることを表している。(13c) (13d) は人間の内部に抽象的属性があるという位置関係を表している。

(11) ~ (13) のような there 構文では、ある物がある場所に存在することを表している。3 節では、have 文が人と物の近接関係を表していると分析した。加賀 (米山・加賀 2001: 144) は、場所を単純な場所と (物や事に) 影響を受けた場所に分類し、後者は、物との単なる位置関係を表しているのではなく、人と物の間の動的な関係から何かしら影響を受けたものであると分析している。子どもの have 文は近接関係を表すが、その主語である人は、単なる場所ではなく、物との間に何かしら動的な関係があるものであり、その影響を受けたものと考えられる。この考えに基づくと、言語獲得のどこかの段階において、子どもの言語知識の中で、何かしらの動的関係によって影響を受けた場所が、所有者に移行することになるが、そのメカニズムの詳細は今後の課題としたい。

3 節で、典型的な所有の意味が未習得である期間が存在することを示したが、その期間に、buy のような典型的な所有を意味構造の一部として持つような動詞が使われる場合には、大人の使用と異なっていることを意味する。buy は早くから発話される。T 児は 1 歳 7 か月から、Ross は 2 歳 4 か月から、Mark は 3 歳 7 か月から観察される。1 歳から 2 歳の T 児はお金の受け渡しは理解していなく、物が店から自分のところに移動することを buy で表していると Tomasello (1992: 80) は分析している。この分析が妥当であるかどうかは、発話文の考察だけでは確認できない。これをどのように検証するかは今後の課題としたい。

## 5. 最後 に

本研究では、英語児の自然発話資料に基づき動詞 *have* を含む発話文を分析した。その結果、以下のような子どもの獲得過程で見られる特徴を明らかにした。

動作動詞 *have* は 2 歳から使われ始める。

状態動詞 *have* は 2 歳から使われ始める。大人は使用しないが、人と物の「近接関係」としての使用頻度が高く、年齢が上がるに従ってその頻度は下がるが、5, 6 歳になってもその使用が無くなることはない。2, 3 歳から使用頻度は少ないが、「携帯関係」「全体と一部の関係」「家族友人関係」が表される。3 歳以降に「典型的な所有関係」が少しずつ表されるようになる。「典型的な所有関係」を表すには、「物が人のそばにある」などの条件に加えて、所有者が所有物の独占権を持つ、所有物に価値がある、所有関係が長期にわたるという条件を同時に満たさなければならない。この点が典型的な所有関係の意味の習得を困難にしているように思われる。英語児の叙述的所有表現の獲得に関する仮説として (14) を提案する。

(14) 英語児の獲得過程には、have 所有文に関しては近接関係から典型的な所有関係への意味の拡張がある。

## Appendix

Ross (1;4 ~ 2;11) の *have* を含む発話例合計 64 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人、動物	LOC30, LOC,ACT1 POSS0	LOC1 POSS'	ACT,LOC1, LOC'1	WP4	WP'1
植物	LOC0			WP1	WP'0
人工物	LOC5			WP0	WP'0
無形概念					WP'0

動作文：ACT19：人+物 17 人+事 2

Ross 3 歳の *have* を含む発話例合計 256 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人、動物	LOC58, LOCACT38, POSS11	POSS'5	LOC'21	WP22	WP'3
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC4	LOC1		WP9	WP'0
無形概念	LOC1				WP'0

動作文：ACT83：人+物 77 人+事 4 物+人 2

Ross 4 歳の *have* を含む発話例合計 113 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人、動物	LOC19, LOCACT17, POSS4	POSS'2	LOC'21	WP16	WP'0
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC1	POSS1		WP1	WP'0
無形概念					WP'0

動作文：ACT31：人+物 22 人+事 9

Ross 5 歳の have を含む発話例合計 155 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC <sup>ACT</sup> 31, LOC18 POSS7	POSS'4	LOC'9	WP20	WP'5
植物	LOC0			WP1	WP'0
人工物	LOC3			WP3	WP'0
無形概念					WP'0

動作文: ACT54: 人+物 50 人+事 4

Ross (6;0 ~ 7;5) の have を含む発話例合計 118 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC13 LOC,ACT12 POSS10 LOC,POSS2	POSS'11	LOC'15 ACT, LOC2	WP2	WP'5
植物	LOC1			WP0	WP'0
人工物	LOC2	LOC1 LOC,ACT1		WP3	WP'3
無形概念					WP'1

動作文: ACT34: 人+物 34

Mark 2 歳の have を含む発話例合計 5 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC <sup>ACT</sup> 1, LOC1, POSS0	POSS'0	LOC'0	WP1	WP'0
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC0			WP0	WP'0
無形概念					WP'0

動作文: ACT2: 人+物 2

Mark 3 歳の have を含む発話例合計 83 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC20, LOC <sup>ACT</sup> 11, POSS4	POSS'5	LOC'5	WP4	WP'2
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC1			WP1	WP'0
無形概念					WP'0

動作文: ACT30: 人+物 30

Mark 4 歳の have を含む発話例合計 166 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC35, LOC <sup>ACT</sup> 12, POSS2	POSS'6	LOC'20	WP26	WP'2
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC0			WP5	WP'0
無形概念					WP'0

動作文: ACT58: 人+物 51 人+事 7

Mark 5 歳の have を含む発話例合計 45 文

A \ B	物 a	家族・友人	事	具体的属性	抽象的属性
人, 動物	LOC <sup>ACT</sup> 7, LOC6, POSS2	POSS'0	LOC'7	WP8	WP'1
植物	LOC0			WP0	WP'0
人工物	LOC0			WP0	WP'0
無形概念					WP'0

動作文: ACT14: 人+物 11 人+事 3

\* 本研究は平成 25 ~ 29 年度日本学術振興会科学研究費 (基盤研究 (C) 課題番号 25370561 研究者代表 松藤薫子) の助成を受けた研究成果の一部である。

## 引用文献

- Cambridge Dictionary Online (2015) Cambridge University Press.
- GIVÓN, T. (1984) *Syntax: A Functional-Typological Introduction*, Volume 1. John Benjamins.
- HEINE, B. (1997) *Possession*. Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』NHK 出版.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- Longman Dictionary of Contemporary English (2015) Pearson Education Limited.
- MACWHINNEY, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk* (3<sup>rd</sup> edition). Lawrence Erlbaum Associates.
- 松藤薫子 (2012) 「永続的所有を表す叙述表現に関する英語と日本語の比較: Stassen の類型論研究に基づいて」『日本獣医生命科学大学研究報告』61, 60-70.
- 松藤薫子 (2014) 「生成文法理論に基づく叙述的所有表現の一考察: 普遍的特性で規定されている部分と経験により獲得される部分」『日本獣医生命科学大学研究報告』62, 89-96.
- 松藤薫子 (2015) 「日本語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察」『日本獣医生命科学大学研究報告』63, 34-43.
- Merriam-Webster (2015) Merriam-Webster, Incorporated.
- Oxford Dictionary of English (2005) Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary (2004) Oxford University Press. (略 OED)
- TAYLOR, J.R. (1996) *Possessives in English*. Oxford University Press.
- TOMASELLO, M. (1992) *First Verbs*. Cambridge University Press.
- 米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』研究社.



# Acquisition of Predicative Possessive Expressions by English-speaking Children

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language, Nippon Veterinary and Life Science University

## Abstract

This study examines the developmental course of acquiring predicative possessive expressions based on the naturalistic data collected from two English-speaking children. The study considers the following two aspects of language acquisition: (A) the linguistic knowledge of English-speaking adults and (B) the language characteristics of American children. The results of (B) are concerned with some characteristics observed during the course of development of the English language. The following are the aspects of language acquisition:

(A) The linguistic knowledge of English-speaking adults: the final state of language acquisition

The transitive verb “have” takes two arguments as in X and Y. Sentences with the verb “have” express actions or states. Active sentences convey “X is doing Y, X receives Y, X is eating or drinking Y,” and so on. Stative sentences convey “X owns or possesses Y.” The possessive relation is very complex and multi-faceted as evident from the five properties given below by Taylor (1996) and Heine (1997). They have suggested that this relation can be appropriately characterized in terms of a cluster of independent properties like that in (1) and is based on “family resemblance”, unified by an overlapping of similar characteristics. It is possible that slight and substantive relations can be interpreted as derivations from the paradigm case (X owns or possesses Y) as given in the following properties below:

- (1) a. The possessor is a human being.
- b. The possessed is an inanimate entity, usually a concrete physical object of value.
- c. The possessor has the exclusive rights to use the possessed.
- d. The possessed is located near the possessor.
- e. The possessive relation is a long term one. (Taylor 1996: 340, Heine 1997: 38-39)

All the five properties listed in (1) describe paradigmatic possession. Some atypical possessive relations include those of family/friends, carrying something, a part of a whole, and the proximity of the possessor.

(B) The language characteristics of American children at an intermediate stage of language acquisition

Sentences containing the active verb “have” begin to be used right from the age of two. Furthermore, sentences containing the stative verb “have” and describing an event wherein the object is located near the human possessor like that in (1d) are used more often right from the age of two. However, this tendency to use stative verbs is not observed in adults. The frequency of using stative verbs in such a way decreased as the children grew older, although the use was still prevalent even among five- or six- year olds. The relations of carrying something, a part of a whole, and family/friends were expressed with low frequency from the ages of two or three. The typical possessive relation was gradually expressed from the age of three.

A typical relation must simultaneously adhere to all the five properties shown in (1). It appears that children face difficulty while learning that sentences with the verb “have” are particularly related to the value of the possessed, are the possessor’s exclusive right, and are a long term feature of the possessive relation. Consequently, the following hypothesis concerning the meaning of possession has been proposed:

- (2) In the course of English language development, the meaning of the “have” possessive sentence extends from the relation of the possessor’s proximity to that of typical possession.

Future directions for research in this area are as follows: (i) to test the proposed hypothesis by conducting an experimental study and (ii) to perform a comparative study to determine whether a common principle underlies the acquisition of predicative possessive expressions in Japanese and English.

**Key words :** predicative possession, child language acquisition, English language

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **65**, 25-33, 2016.